修士論文要旨

活発な話し合い活動を中核とした学級経営
―子ども達の学力と自己肯定感の高まりを育むための指導法―

Classroom Management based on Students' Active Participation in Academic Group Discussion
―Teaching Methods and Strategies to Enhance Students' Self-efficacy and Academic Performance―

彦島　康美（Yasumi Hikoshima）　　指導：佐々木　和義

【問題と目的】

学級における自己効力感や学級満足度向上のために，学級単位の社会的スキル訓練（以下C-SST）が一般的に取り入れられているが，日々の学習指導で積み重ねている言語活動が自己効力感や学級満足度，および学力向上への影響の有無に関する研究はほとんど見当たらない。そこで，本研究では，C-SSTと話し合い活動を併用した場合，自己効力感や学級満足度，および学力に及ぼす影響を検討する。「C-SST+話し合い活動を行う群」を訓練群とし，C-SSTのみを行う群を待機群とする。現場の教員にとって，学級集団の高まり（本研究で扱う自己効力感や学級満足度，学力）の要因の一つに日々の授業であることが実証できれば，C-SSTによる効果だけでなく，自身の授業の質を高める意義や教材研究，研修への意欲的な参加など自己研鑽の必要性が理解できるため，現場の教員が日々の授業の大切さを実感できる点に関して貢献することができる。

【方法】

1　研究協力者と評定の実施時期

公立小学校第６学年，計58名の児童を対象に，①「Questionnaire -utilities 楽しい学校生活を送るためのアンケート」（河村，2006）（以下「Q-U」）（Pre（5月）／Post（10月）），②文部科学省による全国学力調査質問紙より抜粋した国語に関わる評定（Pre（全国学力調日）／Post（10月）／FU（Postの４週間後））→各項目において，４件法で回答を求めた。③入間地区学力テスト（Preテスト）と業者作成（Postテスト）のテスト結果（Pre（全国学力調日）／Post（各単元終了後））→集計に当たっては，各学級担任が集計し，学級の平均を計算した。FU後に，訓練群には，話し合い活動の感想用紙として「ふり返りシート」を実施した。

2　C-SSTにおける目標的スキル

①主張的な話し方②異なる意見の表明③個人的な限界の表明（断り方）

3　話し合い活動および般化促進の手続き

学校生活で実際に起こった事象を使ってC-SSTを実施する機会利用型SST（多賀谷・佐々木，2004）を使用した。

①いくつかの選択肢から自分の意見に近いものを選び，②自分の支持する意見に挙手をし，③全員が教室の真ん中に机を向けて互いの意見を話し合い，④再度自分の支持する意見に挙手をする，という順番で行った。所要時間は約15～20分程度で，待機群は，11月以降に同様の取組を行った。

【結果と考察】

(1) Q-Uによる自己評定

「学習意欲」（Fig. 1）では，分散分析の結果，学級と時期の交互作用が有意であった（F (1, 56) =4.92, p<.05）。また，単純主効果の検定を行ったところ，待機群のPostの評定平均点がPre比べ，有意に低かった（p<.01）。「学級の雰囲気」（Fig. 2）では，学級間の主効果のみが有意であった（F (1, 56) =9.99, p<.01）。多重比較の結果，待機群のpre/post間における有意な差は見られなかった。訓練群では，Preの時点で平均点が高く，天井効果を示していたために，それ以上の上昇は期待されなかったことから，話し合い活動の取り組みの持続が，学習意欲を高め続ける要因になっていると考えられる。

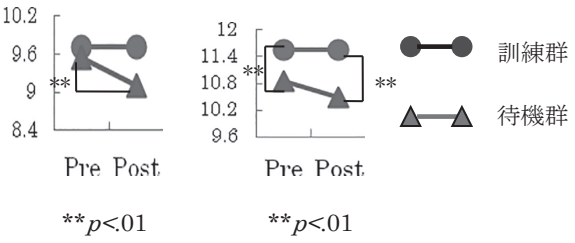


Fig. 1「学習意欲」　Fig. 2「学級の雰囲気」

(2) 質問紙による自己評定

「興味・関心・態度」と「話す・聞く」の観点では，訓練群が統制群に比べて，５％水準で有意に高かった。「書くこと」「読むこと」では有意な差は見られなかったが，ノンパラメトリック検定の結果，訓練群において得点の低かった低群の児童において「話すこと・聞くこと」におけるFUテストがPreテストに比べて有意に増加していた。

(3) 学力の結果

訓練群が統制群に比べて有意ではなかった。Pre／postテストの難易度の違い，話し合い活動が短期的に直接学力には結びつきにくいことが要因と考えられる。

【総合考察】

日々の授業の工夫によって，子どもたちの自尊感情や自己肯定感を高めたりする可能性が示唆されたことから，教員の自己研鑽の重要性が本研究によって示された。機会利用型SSTとの併用によって，子どもたちの心身の伸長への効果も期待されることから，本研究における課題を改善し，その効果をさらに検証していくことが求められる。